



飛行機を通して 夢と交流の輪を広げよう！

夏休み特別企画

夏休みは“空の仕事”を知ろう！



航空会社の仕事に興味をもつ中学生、高校生を対象としたイベントをこの夏も開催します。JALグループで活躍する現役パイロット、キャビンアテンダント、整備士、グラウンドスタッフが仕事に就いたきっかけや職務内容、やりがいなど、中高生の皆さんがもつ、将来の夢に関する質問に直接お答えします。多くの皆さまのご参加をお待ちしています。

開催日時：① 7月23日(土) 13:00～16:30
② 8月22日(月) 13:00～16:30

開催場所：JAL本社(東京・野村不動産天王洲ビル)ウイングホール
募集人数：各回最大100名様(お申し込み多数の場合は抽選)
※なお、当イベントへのご参加は、中学・高校生ご本人のみとさせていただきます。
お申し込みの詳細は、www.jal.com/ja/csr/interview/ をご覧ください。

JAL 折り紙ヒコーキ教室



JALグループでは、折り紙ヒコーキ協会認定の資格を取得したボランティア社員が、2007年より日本および世界各地で「JAL 折り紙ヒコーキ教室」を開催しています。今年は4月29日、30日に行われたインターネット動画関連イベント「ニコニコ超会議2016」で特設ブースを設置。2日間で約7,000名の方が折り紙ヒコーキを作り、的当てや着陸ゲームで盛り上がりました。随時開催している「JAL 折り紙ヒコーキ教室」で、皆さんご自身の折り紙ヒコーキを飛ばしましょう！

教室の内容、お申し込みの詳細は、
www.jal.com/ja/csr/soraiku/origami.html をご覧ください。

産を中心とした、本格的な荒浜の農業復興に取り組んでいます。復興のシンボルとして行っている綿の栽培では、今年からさらにもう一歩進んだ取り組みとして、研修生から社員になって3年目の佐藤準さんが、綿花栽培の担当になりました。以前、栽培を成功させた名取農場の佐々木和也さんの協力もあって、種から育てた苗は立派に成長し、畑に定植した苗もしっかり育っています。これからの成長と収穫が楽しみです。また、荒浜は近隣や県内外の学校との交流も大切にしています。子どもたちに収穫の喜びを味わってもらいたい、そんな思いと共に荒浜の綿花は育っています。

一方、昨年真っ白な綿が畑一面に実る、という見事な光景を見せてくれた名取農場では、佐々木さんがさらなる収穫量アップを目指して研究にいそいそと取り組んでいます。4月上旬に種をまき、40日ほどかけてビニールハウスで苗を育て、広い畑に定植するまでをほぼ一人で作業しています。5月中旬には既に70アールの畑すべて、苗の植え付けを終えていました。「昨年の収穫で喜んでくれた人を、もっと驚かせたいんです」と佐々木さんから力強い言葉をいただきました。



01. 東松島に笑顔で集う JAL グループのボランティアたち。02. 綿花の苗に興味津々。03. スタートにふさわしく晴天に恵まれた。04. 荒浜の佐藤さんは今年から綿花栽培担当に。大切に苗を育てる。

東北コットンプロジェクトに関する詳細は、
下記のウェブサイトをご覧ください。
www.tohokucotton.com/

東北コットンプロジェクト 6年目の綿花栽培が始まりました

東北コットン
TOHOKU
COTTON
PROJECT



東日本大震災直後からスタートした「東北コットンプロジェクト」は、6年目を迎えました。復興、そしてその先へ——。綿花を育てる東松島市、仙台市の荒浜、名取市それぞれの農場で、今年も新たな挑戦が始まります。

文/宮川真紀 撮影/中野幸英

今年は綿花の種ではなく 「苗」の植え付けに挑戦

新緑が目眩しく、爽やかな風が心地よい初夏の東北。水を張った田んぼが増え、復興の兆しが年々感じられます。震災が起きた2011年にスタートした東北コットンプロジェクトは、6年目を迎えた今年も東松島、荒浜、名取それぞれの畑で秋の实りを目指して準備を始めました。

東松島農場では、チームメンバーやボランティア50名ほどが集合。今年は綿花の種ではなく、昨年ここで採れた種をポットにまいてビニールハウスで育てた苗を、畑に植えました。プロジェクトも6年目となると、当初農作業には馴染みのなかったメンバーもだいたいが慣れて、テキパキと分担して作業を進めます。可愛らしい双葉が出た苗は、土の部分を崩さないようにポットから取り出すのがなかなか難しく、苦労しながら作業しました。そして、畑に60センチメートル間隔で穴を開け、そこに丁寧に苗を植えていきます。作業した5月14日はまさに五月晴れ、暑いくらいの陽気だったので、植えた苗にしっかりと水やり。全員で協力して、約60アールの畑に苗を植えました。

この作業を行ったのは、先の熊本地震からちょうど1カ月たった日。集まったメンバーの中には熊本へボランティアに行った人もおり、被害状況など現地の様子を話していました。また、

たくさんの笑顔のために 思いを込めて綿を育てる

この日参加したJALグループ13名のなかに、被害を受けた熊本県の出身者もいました。「昨年の種まきに次いで2回目の参加ですが、今回故郷が被災地となり、昨年とはまた違った思いで参加しています。この東北で、熊本の復興支援に繋がるヒントが得られるのでは？」と考えています(コーポレートブランド推進部・香取恵利子)と話します。震災、復興を自らのこととして考えて共有していく、東北コットンプロジェクトはそんな場にもなっているのかもしれない。

